

個々の状況に応じた不登校児童生徒に対する多様な支援の実施

《 概要 》

スクールソーシャルワーカーや相談員、学習支援員による個別指導と一人一人に応じた学校行事等への参加を促す働きかけにより、生活リズムの改善及び基礎学力の向上等、学校復帰を目的とした支援を行った。

児童生徒の居場所づくり、主役になれる場づくり、自己肯定感の向上などを目的とした体験学習を実施した。

不登校傾向にある児童生徒の支援ニーズの早期把握と保護者への相談支援の機能強化を図るため、ICTの活用を推進した。

《 相談・支援等の実際 》

目標・方向性

学校復帰に向けた支援

多様な体験学習の充実と児童生徒の居場所づくり

ICTを活用した教育相談体制の構築

相談・支援、取組等の状況

- ・児童生徒が課題意識や目標をもって学習に取り組むように促すとともに、基礎学力の向上を目指した自主的な学習と課題となっている教科の解決を図るため、学習支援員による小集団指導や個別指導を行った。
- ・学校と連携し、学校行事等の事前学習への参加等、教育サポートセンターから学校復帰へのスムーズな移行を図った。
- ・家庭と連携し、生活リズムの見直し等、生活習慣の改善を図った。
- ・社会性等を育む体験活動を重視し、通室に対する意欲を喚起した。
- ・活動の意欲を喚起したり、対人関係を広げたりするため、自然体験や社会体験等、学校とは違った学びの場を設定した。
- ・少人数のグループを編成することにより、役割を明確にした体験活動を行い、コミュニケーション力や責任感の育成を図るとともに、成功体験を積み重ねることで自己肯定感を高めた。
- ・スクールソーシャルワーカーによるコミュニケーションアプリを活用した教育相談体制を構築した。
- ・必要に応じてスクールソーシャルワーカーが学校や医療、行政などの関係機関と協議し、組織的な対応を図ることにより、保護者にとって、いつでも信頼できる人とつながることができるという安心感を醸成した。

《 取組の成果 》

個々の状況に応じた不登校児童生徒の支援に向け、学校や福祉等の関係機関と連携を図り、支援体制を充実させることができた。

体験学習の実施日は普段より出席する児童生徒が多く、積極的に仲間と関わろうとする姿が見られるなど、児童生徒の居場所づくりのきっかけにすることができた。

コミュニケーションアプリを活用することにより、保護者との連絡や相談が円滑になり、教育相談体制を充実させることができた。

SSW との連携で通級を開始し、高等学校進学を目標に自立を目指す取組

《 概要 》

当該生徒（中学校第3学年女子）は、家庭的な事情で小学校5年生の時に本市に転入した。転入前から登校しぶりがあり、転入後も徐々に欠席日数が増加した。中学校入学後、当該生徒はほぼ欠席の状況がみられたことから、スクールソーシャルワーカーとの相談や連携を開始し、週に一度、教育支援センター内で関係職員との面談や学習支援を実施した。

当該生徒の不登校の要因を踏まえ、教育支援センターの目標や方向性に基づき、毎日通級できることを第一に指導するとともに、高校への進学を目標にプログラムを考え、当該生徒を支援した。

《 相談・支援等の実際 》

目標・方向性

安定した生活リズム

集団生活への適応と
自己肯定感を意識

基礎学力や学習習慣
の定着

相談・支援、取組等の状況

- ・不規則な生活習慣であった当該生徒に、毎日決まった時間に就寝や起床し教育支援センターの開始に間に合うよう行動することを習慣化させた。また、生活リズムが落ち着くよう繰り返し指導することで、遅刻が多かったものの親の送迎なく通室できる日数が増加した。
- ・集団生活への適応力育成をねらいとした午後のプログラムにおいて、軽スポーツの時間は主に卓球、全員交流の時間はポッチャやモルックのゲームなど、意図的に他者と関わる活動を取り入れた。その結果、昼休みや放課後もトランプやハサミ将棋をする姿が見られ笑顔で楽しむ様子が増えた。
- ・自学自習の時間、国語、数学、英語に力を入れて取り組み、既習の漢字や四則計算、基礎的な英語を自分の力で解けるようになった。
- ・学級担任や教頭が訪問し、信頼関係を築いたことにより、課題や関係書類の提出日、進路に関わる教育相談の日程等の約束をほぼ守ることができた。
- ・入級後もSSWや特別支援教育相談員との連携を継続し、目標とする高等学校を決めてからは、自信をもって取り組む姿勢が少しずつ増え、目標に向けた意識も強く抱けるようになった。

《 取組の成果 》

2月末の学校復帰を目標とし、毎日通級することで生活リズムが安定してきているとともに、高等学校進学に向けて、社会的な自立への意欲やコミュニケーション能力なども高めることができた。

教育支援センターにおける小集団での生活を通して、協働的な活動に積極的に取り組み、成功体験を積み重ねたことで、協調性や自己肯定感の意識を高めることができた。

同世代の生徒や指導員と関わる体験などを通して、自分の中にあつた苦手意識を徐々に解消するとともに、他者とのコミュニケーションなどに、柔軟に対応できるようになった。

逆風張帆 ～ 逆境を前に進む糧とするために～

《 概要 》

令和4年度(2022年度)の不登校出現率は、小学校0.53%、中学校3.26%である。

本市の適応指導教室は、不登校及び集団不適応児童生徒の将来の社会的自立を支援するため、学校・家庭(保護者)と適応指導教室が連携を密にし、適切な支援を行っている。

各学校の不登校・いじめ等の取組及び成果・課題についての実践交流、不登校児童生徒への対応の事例交流、不登校児童生徒を対象とした登山体験や陶芸体験に取り組んでいる。

《 相談・支援等の実際 》

目標・方向性

学校との情報共有
とスモールステップ
による意欲化

チームとしての対
応力向上

相談・支援、取組等の状況

- ・学習時間において、児童生徒との対話を重視し、学習意欲や前向きな考え方を引き出す工夫を行った。また、児童生徒の学習状況を学校と共有し、学校復帰への動機付けを図った。
- ・児童生徒が時間の使い方に着目し、食事や睡眠等の基本的な生活習慣を見直すことができるよう、生活リズムの改善【心が落ち着く明るい環境づくり】に向けた健康に関するアドバイスを随時行った。
- ・児童生徒と学校とのつながりを意識し、タブレットを活用した学習支援を積極的に行った。
- ・学校と連携し、別室登校及び放課後登校等の対応を工夫した。
- ・「登別市いじめ・不登校等対策会議」事業として、市内の全教職員を対象に、児童生徒の心に寄り添う共感力や自己肯定感を育む指導力を高めることができるよう、「教職員研修会」や「指導力向上研修」をオンデマンド方式で開催した。
- ・各校での支援を充実させるため、スクールソーシャルワーカーと教育指導専門員による学校訪問を実施したことにより、他校の実践を共有し、チーム力の向上を図ることができた。
- ・児童会と生徒会の代表による「鬼っ子フォーラム」を開催し、「みんなが通いたくなる学校づくり」をキーワードに、トークセッション等で考えを深め、各学校の取組が充実した。



《 取組の成果 》

適応指導教室(名称:鬼っ子広場)には平成20年から61名、陶芸体験には平成24年から74名、登山体験には平成28年から13名が通室しており、児童生徒は授業や活動に主体的に取り組むことによって自己肯定感や登校意欲を高めている。

「登別市いじめ・不登校等対策会議」の事業として、「いじめ・不登校対策会議」における事例研修や、オンデマンドで開催した「指導力向上研修」等により、各校の取組が充実した。

「不登校児童生徒サポートハウス」フェニックスの活動

《 概要 》

令和5年3月末現在の、在籍児童生徒に占める不登校割合は、市内全体で2.76%となっている。スクールソーシャルワーカーが、定期的に学校を訪問し、情報を共有するとともに、児童生徒の状態や不登校に至る要因及び背景を探り、学校とともに支援策を検討している。

不登校児童生徒が、主体的に社会的自立や学校復帰に向かうよう、安心して過ごすことのできる居場所を提供し、学びに向かう力を身に付けるためのエネルギーを蓄える場として、不登校児童生徒サポートハウスを週3日程度開催している。

《 相談・支援等の実際 》

目標・方向性

学校との情報共有と協議及び相談体制の構築

学校復帰に向けた対応

相談・支援、取組等の状況

- ・スクールソーシャルワーカーが定期的に学校を訪問し、不登校児童生徒の情報共有と支援策等を協議している。
- ・スクールソーシャルワーカーが、不登校や学校生活に悩みをもつ児童生徒及び保護者と面談(含家庭訪問)や電話相談、いじめLINE相談を受けるなどの支援体制を整えるとともに、学校と相談の上、家庭と定期的に連絡を取り、児童生徒の状況を把握している。
- ・児童生徒が通室する「不登校児童生徒サポートハウス」は、不登校児童生徒が安心して過ごせる居場所となり、主体的な社会的自立や学校復帰に向けたエネルギーを蓄える場となっている。
- ・スクールソーシャルワーカーは、通室している児童生徒や、課題を抱える不登校児童生徒が在籍する学校を毎月末に訪問し、管理職等と情報共有及び教育相談を行った。

《 取組の成果 》

スクールソーシャルワーカーと学校、保護者との連携により、学校に登校することができず、家庭にこもりがちな児童生徒を「不登校児童生徒サポートハウス」への通室につなげることができた。

「不登校児童生徒サポートハウス」が、児童生徒にとって安心して過ごすことのできる場所となり、サポーターや他の不登校児童生徒と対話することで家族以外の人に対する信頼が生まれ、主体的な社会的自立や学校復帰に向かう意欲につなげることができた。

通室することで、生活リズムの改善や信頼感、勇気、自己有用感等のエネルギーが満たされ、児童生徒の登校意欲の向上につなげることができた。また、高等学校進学後に通室時の経験を生かして、自分の力を発揮できる居場所を見つけ、生徒会役員となった生徒がいるなど、主体的に活動する意欲を育むことができた。

不登校児童生徒支援「あぶた読書の家」の活動

《 概要 》

町内において、不登校児童生徒数が増加したことにより、平成28年度から「あぶた読書の家」において不登校児童生徒に係る支援を開始した。

スタンス

- ・受容と共感の態度で児童生徒の自己決定を尊重し、自己肯定感を育む対応に徹する。
- ・児童生徒の個々の状況に応じた学習支援を行い、スムーズな登校につながる支援を行う。
- ・登校のみを目的とせず、将来の社会的自立という観点からの支援を行う。
- ・関連機関と連携しながら、一人一人の状況に応じた対応を探る。

《 相談・支援等の実際 》

目標・方向性

共感的な理解による相談支援

個々に対応した学習支援等

学校や関係機関との連携

相談・支援、取組等の状況

- ・来所による児童生徒及び保護者からの相談を受けるとともに、希望に応じて訪問相談を行っている。
- ・教職員への教育相談・支援を行うとともに、希望があれば教職員研修を実施し、指導助言を行っている。
- ・児童生徒に対しては、傾聴を心がけ、自己決定を促しながら、自己肯定感を高めることを重視した支援を行っている。
- ・学校の課題や個々の学力に応じたプリント学習、ICT機器を活用したコンテンツ等による学習に取り組んでいる。
- ・個別、グループ学習の他に、リモートによる学校への授業参加も可能とし、希望に応じて実施している。
- ・カードゲーム等のレクリエーション、誕生会、季節行事等、児童生徒に応じた取組を行っている。
- ・児童生徒及び保護者の希望により、訪問型の学習支援も実施している。
- ・各学校に年1回以上訪問する他、「hyper-QU」を年2回、各学校で行ってもらい、児童生徒の実態把握と情報の共有化を図っている。
- ・児童生徒が来た時は必ず学校へ連絡し、担任や教科担当教諭が「あぶた読書の家」に来て指導したり学習課題を相談したりする等、連携を密にしている。
- ・学校カウンセラーや医療関係等との連携を図っている。



【施設の様子】

《 取組の成果 》

教育相談や個々の状況に応じた支援により、不登校に対する消極的な考えが軽減され、児童生徒だけでなく保護者も心の安定が保たれるようになった。

児童生徒の興味・関心のあることについて傾聴するとともに、仲間と一緒に活動することで、児童生徒は自分のよさに気付き、自己肯定感を高めることができた。

希望する進路の実現に向けて、意欲的に取り組む姿が見られた。

- 学校との情報交換や連携を綿密に行うことにより、学校における不登校児童生徒への対応が改善された。

自己肯定感を高め、社会的な自立を目指す支援

《 概要 》

令和4年度(2022年度)の不登校出現率は、小学校3.3%、中学校8.8%である。スクールソーシャルワーカーや町子育て支援課、スクールカウンセラー及び児童相談所等と情報を共有し、連携を図りながら改善に向けて取り組んでいる。

社会的な自立を目指し、必要な資質・能力を身に付ける。

「共感的な理解による適切な相談支援」、「現状や実態に合った学習支援」、「学校との連携」、「保護者との協力関係」、「関係機関との連携」、「不登校の積極的な改善」に取り組む。

《 相談・支援等の実際 》

目標・方向性

共感的な理解による適切な相談支援

現状や実態に合った学習支援

学校との連携、関係機関との連携

相談・支援、取組等の状況

- ・児童生徒の訪問相談や来所相談など、「個別教育相談」及び保護者の来所相談を行っている。
- ・教員への教育相談及び支援として、「在籍校への指導助言」を行っている。
- ・教科等の学習指導を行い、個別支援や小集団活動、運動等の体験的な活動を行っている。
- ・学習時間、ICT端末を活用した調べ学習を積極的に行っている。
- ・学校と連携したオンライン授業を行っている。
- ・日誌を使い生徒が主体的に学習を進めるよう支援している。
- ・適宜、学校や学級担任との情報交流会を行っている。
- ・年2回、不登校対策会議を行っている。
- ・月1回、学校訪問を行っている。
- ・学校、町、民生委員、児童相談所等が連携したケース会議を、適宜行っている。



【施設の様子】

《 取組の成果 》

不登校対策等合同研修会以降、指導員による月例の学校訪問を実施し、相談や交流の機会が充実できたことから、通級する児童や生徒が増えた。

児童生徒一人一人の個性を大切に受け止め、自ら考え、判断する機会を適切に取り入れることで、自信を取り戻し主体性が向上した。

家庭の協力を受けながら、学校やスクールソーシャルワーカーが適切な支援を行うことで、児童生徒の登校できる日が増えた。